

米国 NINDS 『レビー小体病のバイオマーカーについてのカンファレンス』
(2010年4月25—27日、米国ワシントン D.C.) の報告

金沢大学神経内科 山田正仁

米国の国立神経疾患・脳卒中研究所 (National Institute of Neurological Disorders and Stroke: NINDS) やレビー小体型認知症協会 (Lewy Body Dementia Association: LBDA) によって、NINDS 会議『レビー小体病のバイオマーカーについてのカンファレンス (Biomarkers for Lewy Body Disease Conference)』が、2010年4月25—27日に米国ワシントン D.C.のオムニ・シェラハムホテルで開かれました。日本からは私が招聘され参加してまいりましたので、その概要をお伝えいたします。

この会議の目的は、レビー小体型認知症 (DLB) やパーキンソン病 (PD) といったレビー小体病のバイオマーカーについて討議し、今後の研究の方向性や、臨床的有用性 (診断、病気の進行や治療に対する反応性の評価など) の確立に向けた方向性を示すことです。アイスランドの火山の噴火の影響で、ヨーロッパから渡航できなかった演者は、インターネットを使い講演していました。

会議は、英国のニューカッスル大学の McKeith 教授やノルウェイのオスロ大学の Aarsland 教授によるイントロダクションから始まり、5つのセッションで講演があり、活発な討議が行われました (写真、表)。発表された内容は、体液マーカー (血液、脳脊髄液など)、臨床マーカー (神経心理、睡眠障害、嗅覚など)、画像 (アミロイド PET、FDG-PET、ドパミン画像、MRI、MIBG)、遺伝子、末梢自律神経病理など非常に多岐に渡り、各領域のホットなデータが提示されました。脳脊髄液中の シヌクレインについては、PDでのオリゴマーの高値が報告されましたが、健常者や他疾患とのオーバーラップが非常に大きく、診断に利用するためには、標的とすべき脳脊髄液中の シヌクレインの分子型についてさらに絞り込む必要があるように思われます。

私は DLB や PD の診断における MIBG 心筋シンチの有用性について報告しました。特に DLB の診断では、MIBG は他のマーカーと比較して一段と優れた結果を示していますが、欧米の研究者は MIBG になじみが薄く理解を得にくいことが以前から問題になっていました。今回、現在わが国で進行中の全国多施設共同研究である MIBG による DLB 診断研究プロジェクト

2010年8月9日 レビー小体型認知症研究会 HP

(<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~med19/menu1/pages/dlb.html>) を紹介したところ、ニューカッスルの DLB 研究グループなどが強い関心を示しておりました。わが国から、世界を説得できる、高いレベルのエビデンスを有する研究成果を出していくことが大切と思います。